

橘高薰風  
川柳句集

古稀  
薰風



著者

古稀薰風

橘高薰風

題字\*  
著者  
\*  
装釘\*  
戸田  
ヒロコ

序

視野無限  
この言葉に尽く

昭和四十年初夏のころ

麻  
生  
路  
郎  
識

目次

序 麻生路郎

古稀薫風

9

初句索引

209

あとがき

227

古稀燕風

恋人の膝は檸檬のまるさかな

労働歌蟻が歌えば凄かろう

学生を矢面に立て国貧し

蕎麦の花地球滅びるなど思えず

四面楚歌故郷は豆の花の頃

四月四日長女章子誕生 二句

木も草も花をつけてる誕生日

春闘の真っ只中に子が生れ

一月十三日次女幸誕生

冬晴れて見馴れし山も高く見え

熱の子へ眼鏡をかけたまま眠り

麦の穂が目を刺しそうな都落ち

都会の夜セロリは母の香に似たり

母入院

一匹の蚊に病室の広いこと

母再び入院

かかる時海の晦さを持つ蚊帳よ

わが妻になすべかりしを賀状書く

本心が二伸に女心かも

湯槽出る男海より出るごとし

落選の酒は問答無用なり

おしなべて銀も鉛も卒業す

旨いとも言わず新聞ばかり読み

親捨てた仲とも見えぬ老夫婦

檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

十二月宝石の美の極まれり

惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華

草いきれ万葉の世の相聞歌

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅

これもおやすみなさいで終つてる恋文

老醜の土筆ほどにはなけれども

竹植えて雨うつ音を楽しめり

文机に菜根譚を伏せて留守

鳥取 砂丘 二句

砂丘有情お前と月の出を待とう

旅人も月もやがては去る砂丘

句集「三文オペラ」の岩井三窓君結婚 二句

三文オペラ第二幕へとかかりたり

皆君のもの新妻の寝顔まで

飯を食うさえも勇気の要る日なり

恩借に父の容態ねぎらわれ

万歳万歳淋しさの残りける

籠の鳥とらわれの身の顔してず

妻若し水道一っばいにひねり

浴衣着て又一段と名妓たり

牡丹へは蜂も静かな訪問者

島一つ買うて暮らせば涼しかろ

キリストの肋に似たる昼寝をし

商いのラムネ一本抜く暑さ

先生に床屋の順をゆずるなり

十二月子供ばかりで飯を食べ

立話長うて犬も坐り換え

菊大輪雲湧き上るごとくなり

菊人形小楠公は赤い菊

牛小屋に月光美しき浪費

菊の露ふくんで母の針仕事

フランス語講座女優の書架にあり

父親になつても膝を抱く癖が

父と来てずっと風呂敷持たされる

参観日この秀才の親が来ず

強引な碁をうつ聾をよしとする

恐妻家どこか張子の虎に似る

青春は旗翻るごとくなり

病院の風呂から藤の棚が見え

居酒屋の楽書帖に詩人の名

知恵の輪を抜くよう汚職無罪なり

三味線も弾ける大学教授なり

猫の首つかみ二階を降りてくる

テロリスト神明に加護祈るなり

壯嚴ミサ

聖夜の餐神父の靴は常のまま

学問の灯は落ち着けり師走にも

呼鈴を大言海の上に載せ

人の世や棺に打ち込む釘もあり

霊柩車辻を曲ってから速し

香煙縷々いのち惜しめというごとし

乱れ髪式部の世より恋は憂き

クリスマスカードの雪はしずかなり

魔の山と見えず初日の下にある

風花の今日タイガースキャンプイン

除夜を聞く一つの旅を終えしごと

紫の椅子の愁いはわが愁い

東北行 五句

特急は颯爽鳶の輪を残し

札を尽くし札を失し師と旅にあり

十和田湖

水の精覚め森の精まだ眠し

酸ヶ湯温泉

混浴のさながら古き風俗画

工藤甲吉氏へ

半白のオールバックに知情意が

極月やわが父の死を立話

父恋しわれも経読み鳥として

あわれ子もやがて知るべし父の恋

お使用の継母こわし道こわし

弱肉強食鱈皮の鞆持ち

おとといと昨日と今日の虫の声

富士小さし生みの親をば思い出す

ラッシュアワーちりめん雑魚に相似たり

水中花水に疲れしごとく病む

銀漢へわれも不眠の病持つ

病みて長し仏像のごと拭かれおり

日向ぼこ病衣は襤褸になり易し

水枕干す秋の気が一入に

勲章の欲しい七才七十才

百合も薔薇も花輪になれば俗っぼし

雷蝶ステンドグラスからこぼれ

蜂の歩くは落武者に似る

憂鬱を伝染して帰る女かな

愛別離苦テープの色も濃紫

秋空に遠い景色を思い出し

寺と萩マンネリズムも美しや

愛読書青春以来ツルゲーネフ

青春のわが思い出に一神父

娼婦死し十字架にまた星戴く

將軍に枕して寝る世が久し

川の面の煙突の影音楽的

六法全書の重さと聖書の重さ

火の消えた炬燵の上の置手紙

つり合わぬ恋にかじかむ女の手

行灯の灯は恩愛を思わしむ

忍従の女心に光る貝

黒髪を梳くバイオリン弾くごとく

北陸豪雪 三句

豪雪の今年つくらぬ雪だるま

雪を搔くもはや旅人にはあらず

積雪一丈その下の金魚の朱

降る雪に貧しきものが先ず隠れ

兼六公園

美しいものに雪置く美しさ

囀るは人の飼う鳥武蔵野よ

元日の駅前広場広場となる

元日や王城の内写される

鼻の孔耳の孔まで元旦也

初鏡オールドミスでありけるよ

寝正月ガス中毒をしてへんか

誘拐をされこどもの日母の日過ぐ

ビリの顔もトップの顔も苦しそう

実印に苦悶の情が見えてきた

おたやんは大阪弁で喋りそう

子が病んで錙のごとしわが妻は

惜春の音の一つに昼の三味

大きな滝になろうと思う父の日に

螢飛ぶ一匹なれば人を恋わしむ

禽檻にいる殊に寂しき海の鳥

月光に眠れぬ新しい墓石

因襲は亀の甲羅の重たさだ

鷺の眼も駒鳥の瞳も鳥の目や

進む時計遅れる時計夫婦かな

蝶の妍極まればわが誕生日

明石

蛸壺へ人の子寝かす子守唄

白浜

稲妻に南紀州となりにけり

思案まとまり雨垂れが落つ

飼猫へやさしき言葉旅帰り

坂根寛哉君結婚

結婚をしてもハートのジャックたり

遠き人を北斗の杓で掬わんか

パチンコ屋大人は大志抱かざる

悪銭を分かち淋しさを分かち

人生薄暮空より降りし奴胤の顔

日向ぼこ梅干の種口にあり

城のある町への旅は恋に似る

羽根ペンで書きし嘗ての文学よ

一枚になれば銀杏の葉の形

紹刺する余生を埋めゆくような

君おもう熱もまじれる風邪の熱

旅ごころ旅の前夜を慎むも

元旦も蜘蛛は姿を変えられず

十二月子のやわらかき蹠

十二月三十一日も傍観者

煮凍りよ少年の日は貧しかりき

美しい炭火恋しき鳴雪忌

入試の子と母起きている看病のごと

土に字を書き残し入る試験場

窪田久美子さんへ

淡雪のいつから君を知りそめし

阿古屋貝売る舗いつも朝焼けぬ

鳥取砂丘

母の手をひいて砂丘の狐雨

東郷湖夕日ところを得て沈む

膝に手を置いて井上八千代かな

水都祭初恋の人年とらず

初恋のうすみずいろとなりにつけり

恋なれやわれに鬣あるごとし

恋なれや汝れに羽交のあるごとし

金貸しに蛙のごとく手をつかえ

韓人の服に最も風薫る

鯉のぼり氏素姓なき爽やかさ

制帽の汗を先ず拭き顔を拭く

片肌になり双肌を脱ぐ太鼓

生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん

阿波踊 二句

鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ

われもひとも千手観音阿波踊

鳴門公園

遠めがね海の渦見てのどかなり

別離

曼珠沙華君といることくひとりおり

男の子欲しわが為し得ざること多ければ

わが子男子旭のごときまる裸

産声のはっしはっしと聞えける

出産日父看護婦へ少し媚び

鬼灯よわが七才に恋ありき

銀杏散る風の祭を見るごとし

浜田久米雄氏勇退

いざ孫と麦藁帽に親しまん

串本海岸

ボディービル橋杭岩の力みよう

東京オリンピック

ひた走るアベベ仏陀の相に似る

椅子蹴って立ったに続くものがなし

みぞおち匂う人妻の恋

栄光の日も一日は二十四時

一茶忌の赤林檎より青林檎

灯を消せば彌勒女菩薩毛糸編む

おとがいへマスクをずらす赤電話

木の实彫りおりと見てあれば鶉

除夜過ぎて机上湧きくる泉あり

元旦やわけて四十という齡は

獐猛な熊が歩けり内股で

故郷に残る切株悔いのごとし

わが影の障子の影も香林忌

立ったまま眠るペンギン迷亭忌

子の寝顔汝が父母多くあやまてり

草餅へ墓を並べる死後の縁

掃苔の母の目まいが娘にうつり

墓の前刻去るままに去らしむる

妻よ子よ水の深さが臍を越す

魚屋の魚いろいろ妻が病み

入学へ畳を歩く新らの靴

苑の鶯鳥のよちよち歩き卒園す

金柑は皮を食わるる四月馬鹿

地の果ての如山頂を引き返す

春惜しみおりひと言で事が足り

春愁の最たるは鳥齒を持たぬ

春風の帷に吹くごとき懸想かな

春孤独眼鏡はずせばなお孤独

人生譜柳は日々の風を見す

恩師の死その夜眠しとも眠し

炎天に寒疣立てて師を葬送る

屈辱の紋章女史に坐りだこ

コスモスのほったらかしの美しさ

ボーリング恋のライバル鑿

断崖絶壁断崖絶壁冬の恋

滝冰る信ずべからぬささめごと

長靴の片方どうしてもこける

福寿草父子兄弟に似たりけり

一人去り一人去る聖堂にして

子の頭蜷のごとし可愛ゆし黒し

われに過ぎたり絢爛と死ねる歳

鼻先をつんつん歩く好きな人

草の芽が出たぞおしっこさせながら

大國主命の國の春の雲

石の階童話を讀むにうってつけ

路郎忌に炸裂したるカンナの朱

蓮の花は一茎一花恩師の忌

路郎忌に言葉を飾る人ばかり

鐘の音さらに身のおきどころなし

秋風の天神さまの細道じゃ

絲瓜のあおほどの青なし祖父の愛

栄光のマントの裏は血の色だ

水郷 五句

水郷の微風から雨に移る候

水郷の鯉のぼりこそ泣かまほし

柳ポプラ柳ポプラ水郷よ

水郷の胸の高さに続く水

音のみの世界またよし水の上

兎の目ほどのしずかな恋ごころ

学問の跡形もなし小商人

川上三太郎先生へ

紫綬やよし詩人の胸をいろどるに

明治百年蹄の音は消え去りぬ

赤帽もそのうちみんな齡をとり

十二月あしかの声につまされる

中之島劍先は寂十二月

元日の恋に使いし一時間

オーバーの襟立てさらに破魔矢立て

何もかもぬかるむ戦後明治村

ベトナムや都会の鳩は鏡のいろ

ベトナム遠し子のピストルに斃れる真似

建国祭寒の卵に血がまじり

飯盛山遺恨の如く雪残る

黝々と水かけ不動恋の垢

処女の死鏡の中へ歩み去る

人を待つかたわらの花嗅ぎもして

一日の重さ軽さよ日記帖

風薫る歩きながらのハーモニカ

テレビ見る子を頤と膝に埋め

金環蝕そらエンゲージリングだよ

舟歌は最も人を恋う歌か

同期の桜酒に爛れてしまいきり

句碑ありぬ亡き先生の背丈程の

夏雲の死ねば越ゆべき峰ならん

蠟燭の数来し方の女人像

受験子に昼夜階なす時間表

乗  
鞍

母と来てお伽話の花の色

噴水の形変らず恋終る

明治村醉生夢死の昼の月

明治村烈婦というはすでになし

犬と住む都会の底の夜の底

信濃の旅 三句

霧のダム紺の背広の竜神か

黄色い屋根の旅館に寝たり秋の信濃の

幻の女の息の霧の音

初冬の恋鶴の面着て立ち向かう

十年経て女の言葉あわれなり

汝が祈りふかからしむと雪を給う

天使と同じ羽根でクリスマスカードが着く

立ちたくて立ちたくて蛇木に登り

石くれも三つ積んだら思惟の塔

お元日わが家の波夷羅大将も

青年の歌なまぬるきお元日

お年玉不兌換紙幣ばかりなり

攻める扉逃げる扉を持つあいっ

友来る古きレコード回すべし

乳母車いのち育てしものなつかし

墓があり急に土あたたかくなる

真心をあげて淋しくなりました

待つ人が来て愛犬を放ちやる

税務署出て万の毛穴を押しひろげ

春愁の無より淋しき無限大

笛吹き童子恋ならなくなにならなくに

仏像を恋うるがごとき恋となり

秋吉台石の饒舌雲の黙

朱の鳥居愛恋道の入口か

寂まくと伎芸天女に指紋なし

四十過ぎ闇の深さが見え初めて

尾道にて 三句

師はあらず文学小径埒もなや

尾道や今見下ろせし船に乗る

五月の雨尾道生駒似たるあり

耕耘機色異なれど音同じ

掃苔の隣の墓に帽をのせ

能登から佐渡へ 八句

てんと虫ここにも小さい輪島塗

銭湯に隣す輪島映画館

鬼あざみ能登曇りてふ曇りあり

さい果ての旅に見し滝海へ落つ

海渡るたかが佐渡とは言う勿れ

花の墓大佐渡小佐渡並走す

亡恩や磯の香のせぬ日本海

男ありすっぱり瘦せておけさ節

佐渡を去る

青佐渡を墓と思ひしは只今なり

暮れ切らぬ花火心があとさきで

夜の波ふたりの心縫わせおり

霧の夜の松の林に死後の景

睡蓮に汗くさき身を遠ざける

漆黒のピアノから出る海の音

晩涼の木に吊るされし歌謡曲

秋風に傷なきものはなかりけり

眼鏡屋は翳雲ほど並べたり

一人旅切符切らるる音もよし

草臥れがどつと仁王の大わらじ

スケートを履くと獣の姿勢とる

清原祐志君 二句

耳濡らす涙生涯仰臥の身

君の骨栗拾うごと拾われよ

淀川の水滔々とお元日

冬夜の凍て愛恋の書も真理の書も

牡丹雪ゆつくり俺が昇天す

桂 浜

海の風竜馬の鬢へふところへ

讃岐富士一番星を簪に

夕桜琴朱の布に包まれる

吐く息も吸う息もなし夕桜

恋の句を刻まれし碑の濃陽炎

潮干狩竿突っ立てて帽子掛

猫柳亡き人ばかり思わるる

鳥取砂丘 二句

子と来れば砂丘隅まで砂の山

三人の子と玄奘のごと行く砂丘

原爆忌鳩ら火傷の脚運ぶ

広 島

ここに来て胎児のごとき祈りあり

曼珠沙華恋わるるよりも恋うべしと

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

望郷よ地図の上では三糧

菊花展天守へやさし菊の塀

菊の呼吸処女懐胎もありぬべし

菊の壺薔薇の壺より物思う

青年長髪ピストル型のドライヤー

陸橋は天下の嶮よ梯子酒

クリスマス祈れるものは祈りおり

消防車前方睨む人ばかり

夜の長さ襖をあける猫がいて

一隅というは安けし猫などいて

妻 病む 五句

手術なお神の議りに似し医師ら

手術なお交響樂が鳴りつづけ

呼吸つめていのちを合わす久しぶり

病院の丑満時を尿捨てに

病院の金魚寡多なく退院す

元旦や偈頌のごとくに師の一句

読み初めの今年は石田波郷集

妻再び入院す 三句

妻に病まれ壺中をのぞく日に幾度

病妻は少女のようなくくり髪

袋ごと蜜柑食う子よ母が病み

噴水と相似の緑柳なり

雪国の桜でありし桜漬け

藤巻昌子さんへ

婚を約し月へ帰れぬかぐや姫

光堂大阪地獄から来しに

枕抱いて胃をかばえるか虫を聞くか

斜に見て天のひとでの大文字

大文字額の焼ける火なりけり

大文字夢の多くは夢で終る

額縁を出て薔薇捨てし夫人像

嗚呼清水白柳氏

大輪のぐわらりと菊の散りざまや

入院やわがが来し方の土埃

天井が未来へ移行担送車

麻酔より醒めて必ず夜なりけり

鷺一羽身じろぎもせぬ手術熱

秋の雨しずかに粥がこなれゆく

胃半分肺半分の湯呑かな

霜月悲唱 三句

ハラキリ由紀夫へ雪降らず花散らず

死に行く鉢巻の尾を長垂らし

終焉や裂けてくれない増す柘榴

シンフィーズ美人は美徳だと思ふ

風花す雪子が髪を梳くらしく

長男の頭へ手を載せやすき背丈

通り抜け花の濃淡夜に入りぬ

陰陽石つつじの燃える頃となる

中尾藻介兄へ

男へもやさしい手紙書く男

切手にも金魚が泳ぎ風薫る

梅雨明けの雷どんと路郎の忌

路郎の忌立膝癖も師父ゆずり

路郎の忌天牛に来て落ち着きぬ

馬籠・妻籠にて

お六櫛われを籠らすひともなし

雲波に波雲に似しはたちの日

ベトナムの難民に似た瘦昼寝

生き死には碁石のことでないのなり

默契や野に紫の花が増え

秋が来て笛は太鼓を恋しがる

吉村和美さんへ

葛の花咲き樹下美人嫁ぎしと

憂国忌柿は帯のみ残りたり

切株の俺の五年と子の五年

冬の酒蛸の足こそ親しけれ

白蝶入り黄蝶出て来ぬ寺の門

夫婦にはなれなかつたが冬の旅

枯枝に烏幾世の友情か

革命をめぐらすに湯に身が浮くよ

お元日日本人の目の黒さ

誕生の馬の額の白い星

紅椿雪を解かしていたりけり

黒い炎は人妻の掌の黒茶碗

志操とや嘴にある鼻の穴

手に足に関節のある寒さかな

四つ足で歩けば楽になる傷か

黙契やいまも仏法僧がなく

ギター抱きぼろんぼろんとこぼす悍

吊皮は手枷生涯平社員

受験子のすでに闘う白い息

冬牡丹九死一生かも知れず

一日に精魂尽くす瘦せようだ

反葬は雪の巔から李花の里

琴古く曲新しくいのちの譜

水浴びの鳥を見ている人妻か

少年の幾人いても毬一つ

七月の蜂起の空となりけり

恋人がいま肉眼に入り来る

浄瑠璃寺 二句

見残した夢を見ている塔の朱よ

立たせたき人睡蓮と塔の間

板尾岳人兄

山男山の画集に汗おとす

大文字恋のはじめのごとく点く

大文字はや消えかかる第二割

堀江正朗氏還暦

心眼に六十一の秋が澄み

一生に一度の御籤父のみくじ

当選をしたら蝶を裏返し

人生に起承転結ありにけり

父の忌に障子の部屋もなくなりぬ

父の乗る船の模型が応接間

水飲めば涙に変る恍惚の人

元旦ぞルバング島も元旦ぞ

ルバングの一兵の生宮中歌会

裏梅は聞えぬふりをする女

深眠り母娘相似のカメオ置き

哀歎の底に穴ある植木鉢

裏切られあたたかきもの放尿す

姦計を鯛の目玉にさげすまる

暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や

呼び戻す背なの赤子の名を呼んで

安からめ御身の胎児たり得れば

足摺の雨は遍路へ地から降る

寂滅と遍路の果ての月見草

路郎忌の天守の鯨に見据えられ

陶枕に睡蓮恋し女人より

睡蓮は万丈光の光源よ

ペディキュアの足を仏足頂礼す

遍路杖納めセールスマンの足

夢に見る父は父よりやさしかり

耳垢と耳学問をわびしがる

穏健を徳となすなり福寿草

日の高さ悪事悪事とならぬなり

のけぞって見えた師走の青い空

薬玉の中の鳩なり受験の子

臍の緒がまた生えてくる子の受験

端然と墓のようなる書家の墨

昼の月瓢湖に映る力なし

花つけて白鳥の首シクラメン

聞香の首かしげいる白鳥か

心経の無の字の多き金泥なり

読む限り末法の世も面白し

草花に水をやる世は渴したり

落選す百万言を費して

十年の歳月が澄む竹の節

蝶がいて石に老若男女あり

朝刊の音のさらりと今日も晴

鉄の火と芒の炎男と女

田中を刺し中曾根を刺す標本名黄金虫

牛頭馬頭の雲は動かず原爆忌

禊する蓮花の菓子を口にして

花言葉忘恩もある不死もある

胡座して仏のあぐらより涼し

隠岐行

雨意将に至らんとする摩天崖

長崎行 三句

長崎の霞はまるし湾円く

磔像へつるべ落しに夕日落つ

小便を風に散らしぬ大瀬崎

目に余るものにロビーの登山靴

清しきは秋に衰え冬に死し

西成のシャツステテコは王衣に似

帰省子に地酒の味が真新し

三日月があんなに光るのも勇氣

トンネルが遠くに見える秋の恋

鱗雲びっしり僕の齒は抜ける

天来の妙音蔵す白百合は

白い服の娘に与えしは白薔薇

晩秋に水は一番重くなる

氷囊の下から見てる好きな人

スト権スト昨日は勤労感謝の日

水の上蛇の長さが長くなる

十二月の粹人奇人物語

新年や男も竜も玉を抱く

盃の酒甕の酒より重し

ハワイ行GOのランプか月が出る

ハワイまで星を閲して来たりけり

われら迎うオアフは波のレイかけて

枝のない椰子を夕日がすべり落つ

就中ひよろひよろ椰子の親しさよ

花火爆ぜ微塵地獄にいるふたり

裁かれるのに座布団が敷いてある

偽証する伊藤大久保維新の名

児玉誉士夫の笑い袋や金袋

小佐野児玉の暗い寒山拾得図

勲一等黒き旭日大綬章

エリートの狐が落ちた獄の顔

松本波郎夫人を悼む

おだまきが咲いてる紫の涙

鑑真和上像

おん目元さつき明りのし給える

童唄生別死別異ならず

チューリップ胡蝶の奈落かも知れず

緑陰におならしそうな羅漢さん

鶉もやがて切り絵の闇に紛れたり

酔眼に鶉綱の張りの十二筋

綻びを繕うごとく鳴くちちろ

阿難尊者に遠し恩師の忌

ペン握る指のかたちも枯れはじめ

妹に紙の兜がよく似合う

死後の肋は赤い鳥棲む鳥籠に

板尾岳人兄へ

頂上に汗ひく顔の謝霊運

似てるなと河童は蟪蛄に見入る

仏手柑ひとつ新年の文机に

露草よ額田王が袖を振る

子の名ほど迷わず孫の名を決める

赤鬼も煩惱を持つ臍を持ち

任俠は男のロマン喉仏

ポツペンはブーツの女にも似合う

逝く春へ白だけ残る五色豆

修業とや砥の前で小半日

夢醒めて紙の音する千羽鶴

恋文の緘は水平線に見え

病み上りに心もとなき蝶の目

曼荼羅に原子のごとく仏たち

七月よ煙草の輪にも力あり

裏切りに思い当るは茄子のかるさ

氷柱花電話ボックスには女

きりぎりすちよんと男は立ち上る

臆放り出して社長隙がなし

母一人子一人秋の灯を分ち

志衰えて書く立志伝

月下美人王昭君が逝きます

父の苦悩に裸の煙草が散らばっている

桃の花桃の実桃の核みなわたし

背徳や三面鏡の無数の顔

敗戦忌バスケットから犬の顔

ものを書く姿勢に骨は安んずる

新婚のスプーンに指紋つきはじめ

一芸に秀でし顔へ初明り

初日記夢を針小棒大に

亜鈍さんを祝う

お恥ずかしい古稀と宿老温かし

パントマイムの妻に止めを刺されたり

演出をする齡でない齡でない

樹に添うて力をもらう風の葬

紫に男女の別のあるごとし

昔から女が走る愛の時

水の渦想いの渦も春になり

海鳴りへ標本室の貝の耳

やがて女は友情を持ってあますだろ

牧人さんを悼む

死顔のなご満を持し満を持し

朝顔のファンファールの中僕は生れた

背の小さい方が姉なり桜草

路郎忌や瘦身力士勝名乗

一点鐘わたしのマリヤ歎く

落日と夕日は違う別れ来て

最晩年充実紫陽花濃紫

氷挽く鋸友情も篤からん

寺尾俊平さん新居落成

蔓ばらと善魔の護る城ならん

柳暗やお染久松蔵の窓

紫陽花の炎群愛染不動かな

夏の愛形を変えて翳雲

君にふたごころわがあらめやもモンロー忌

モンロー忌黒子の位置の恐るべし

こおろぎのように泣けたら涅槃かな

城うらのまてばしいの実待つ楽しさ

おもしろさ雀は跳ねて鳩歩く

合歡の花雨に濡れてるのは乳房

恋瘦せの乳房から痩せきしという

鯊を釣る鯊のごとくに群がりて

子と見れば月下美人は宇宙船

大矢十郎氏息女栄子さんの結婚を祝し

花嫁に牟婁の海山弥朗ら

三段峡にて 二句

恐懼せり紅葉と滝の神の前

友情に深入山の名もうれし

走馬灯霊は肉より現なり

一輪の菊は気合で咲くごとし

入学のよい目よい耳よい眉根

ネクタイのままデカンショの輪に入り

花の宴家康ひとり目をつむり

昼の酒遠く雷鳴っている

マズルカへ拙者お相手仕る

鳩時計の鳩が覗いた悪だくみ

建仁寺垣相国寺垣マドモアゼル

紫の花何本も摘み難し

飲む会のハガキは箸で裏返す

初明り祕仏開扉もかくやあらん

悪筆も墨痕淋漓年賀状

削られて以来丘には虹立たず

葡萄食べ終ると焼跡のような

映画ほど静かではない恋終る

田中博造・峰代夫妻に女子誕生

虹の子を千晶とこそは名付けたれ

海の風宮島蟬の越天楽

紫の色の気合が分かりかけ

ラブレター―死屍るいるいとありにけり

悼 大野源一九段

閻王の前でも飛車の気っ腑なり

落椿情炎未だこちら向く

水仙よりスキーのジャンプ端正に

遊学の娘の決心と花のペン

タンポポの絮に意志ありわが怯懦

その日以後語らず書かず娘を思い

苦楽園口のさくらを見に来いと

一年生だけは帽子を着てくれる

ここは土佐河伯と河童呑みくらべ

夕桜釈路郎が向うから

水子塚時に桜も蒼ざめる

牛が眼をつむると大平正芳か

忍耐も少し異なる美女醜女

口説かれてゐるに女は箸止めず

春眠のそのまま覚めぬ死もあらん

蜂蜜に花の香りの遠い人

昼は花を夜は花火を見たふたり

少年のように近頃夜が怖し

タンポポはタンポポという河内弁

自らに同情をして釣りに出た

路郎選集校正しおり路郎忌に

路郎忌のわれよき友と旅にあり

路郎忌の氷も白い炎かな

あの女ほたほた炎落し行く

敗戦日分水嶺の如くあり

敗戦日われ人生を二つ生き

ハンカチを黙って渡す妻の汗

百匹になると鰻も修羅になる

手榴弾かつて握りし掌にレモン

空腹も贅の一つよ名月よ

恩師矍鑠槍さびを口ずさみ

菊の日の白い炎に焼かれける

八百長相撲も礼にはじまり礼に終る

喃妻よ鮎まで値切ることはない

老桜のほつほつと咲く童心か

水仙が並び口開く聖歌隊

こんな恋ならと百人一首かな

河内天笑・野坂つき子さんへ

月が出て蒼天笑う如くなり

銀杏の黄勞瘵よりも透き通り

養命酒汚辱のいのち養えり

淋しさは前行く犬の足の裏

かたくなに句をつくらねば喪のごとし

この花にあのような実が四月馬鹿

選挙をば戦と呼ぶは平和かな

黒百合を見てこの旅はこれでよし

赤い駅青い駅あり人生に

海底の都は憂きか平家蟹

風渡る愛の伝わりゆくさまに

青森行 四句

梅雨ついてブルートレイン青深め

親しさはねふたの顔でお出迎え

恐山四人四本の死人花

恐山空焼けるとき恐山

いつまでも背もたれのない僕の椅子

落武者の強さ髻切れてから

やわらかい枕に義理がすたれ行く

おぞましき議員の胸の赤い羽根

鉄砲玉もひょうろく玉も定年か

真相は大根になる貝割菜

家元のお供で寺の昼を食べ

道化の死蝙蝠傘は舟になり

雪霏々と滝の吐き出すものでなし

古手紙この世のことはこのような

父親の懐ふかき風の糸

杯なめて木曜とらえどころなし

白色も一色ならず死生の裡

水は低きに友も低きに流れるか

お手植えの松枯れながら続く昭和

啓蟄の虫より先に代議士め

横揺りにあしかが歩く金脈へ

寝転んで読むを許さる卒業し

入学と卒業姉妹ピアノ弾く

春情やちまたに枝垂るもの多し

孔雀羽根ひろげくるりと能役者

樂しげは怨嗟の声の小鳥たち

合掌の手が焰とも見えるなり

美しき地獄牡丹の散りしける

青い葉は花よりすがし晶子の忌

落胤の身の放埒が募るなり

父と子と手をつなぎ行く盆の窪

旅人へ何と親しい駅だこと

梅雨の街碧眼灯すごとく行く

ああ五十妻が侮る子が叛く

金脈へ力無き蝦骨無き蚯蚓

涼しげに老樹一蟬点したり

墮地獄のいのちもたった一つきり

かまきりの鎌振り上げて事切れし

穂芒の如き魂ありにけり

勇の川白秋の川恙無きや

横顔の子規も八雲も荒仏

われもまた己を知らずお元旦

年寄の居ぬお雑煮は淋しかろ

われをしも駄馬貴人と名付けんか

悼大山あや子さん

優しい人をなおもやさしく有馬筆

禅僧の描く円に似た大根煮

ぎんなんの水平線も遥かなり

水平線今にどんでん返しある

シクラメン伐折羅大将より激し

形見分け暖かい石冷たい石

嗚呼麻生菫乃先生 三句

計は常にかかるかたちで来る白刃

髭を剃る千本の木を薙ぎ倒す

花の散る今日一日は物言うな

かなしみの西より来れば西へ旅

その時の警策に似た父の文

母の顔安樂椅子の觀世音

猪口を持つ手つき恩師に似て来たり

申告を散歩がてらの老教授

柳川にて

白秋は朱樂のごとし陽のごとし

本棚を砦のように老作家

白菜の悲鳴が妻に聞えたか

藤沢桓夫先生喜寿

清冽な泉を抱いて大樹かな

自愛とはこの一杯よ誕生日

鶴の愚鈍亀の狂気をあこがれる

花の絵の鍋で魚が焦げている

決断の兜をかむる顔になる

赤電話髭の殿下じゃなかったか

月天心男が出会ったのは男

人妻と濁りにしまぬにぎり酒

流木は岸見え出してから焦る

母病むに紅白の別花に多し

砂時計突如竜卷母が死ぬ

その朝も髭を剃ることからはじめ

合歡の花母の乳房を焼いて来ぬ

朝々を羯諦羯諦と悔いつづけ

亡母の闇は鬱金の闇か夢に見たし

亡母の闇この世は雨が降っています

香の銘天菊とあり亡母の闇

白菊千日仏も飽きはしませぬか

墓の前もとの子一人母一人

亡母初盆

送り火を極楽の火と子は信じ

真実のほど雑草の花白し

長女章子結婚 二句

白は光りに光る綿帽子

紅唇もまた光りに光る綿帽子

娘が嫁ぎ炬燵で正座する父か

畏友俊平兄へ

やがて君と伯夷叔斉たるもよし

初光悪人ばらを刺し通し

来し方を溶かせば淡いむらさきか

梅よりも桃に魅かれる少し老い

軽い嘘種なし葡萄食べながら

りんどうの花の情熱こそ確か

軍鶏抱いて男の流転限りなし

梅が言う少し上手に齡とれと

剃髪をして紫の底知れず

余呉の湖灯ともし頃は灯がともし

豹を着て豹の匂いのする女

茶の間では書斎の頑固ほどでなし

揚雲雀迦陵頻伽となりおおせ

落雲雀亡母の居どこは地か天か

紫は仁義礼智信を統べ

白牡丹レーダーよりも雨気を知り

男を磨く女を磨くやや違い

城北菖蒲園

なかんずく紫式部むらさきに

眼鏡拭きほとぼりはもうさめたるか

父の日か秋にはおじいちゃんになる

亡母の闇黒い塚から酒を酌ぐ

郡上八幡

宗祇の水柳一葉と掬うなり

初孫誕生

栗の毬孫は子よりも小さきよ

初孫と握手する一本の指で

僕の富レモン一個を棺に入れよ

正月元旦から物足らぬ物足らぬ

一番に孫の箸紙書いた新春

若者の髭にうたれたためしなし

風邪ひいた顔も魅力であつた頃

面の裏菩薩も夜叉もなかりけり

世の移り変りさびしい雀ずし

吊皮に横溝正史片手読み

花よりも紅葉に似合う紺のれん

のれん分け電話一番違いなり

英雄は花という字にこがれ死ぬ

校長が校長らしい松の内

長年の欲一本の皺となる

日だまりに似て灯だまりが秋にあり

路郎忌のこれも魂金魚の朱

路郎忌の暑さと葭乃忌の寒さ

恋人の名より親しい摩周丸

イカソーメン妻子を思うことなかれ

睡蓮の炸裂もよし五稜廓

サーカスに似て来た五輪大一座

夏の風邪瀬古とマラソン走るなり

本棚に隙間のあるは油断かな

大山も影大山も盆に入り

剃髪をして煩惱のひとつかみ

中国吟行 九句

謝々と栞大人長箸で

死より先ず生おそろしき玉仏寺

サルビアも思想魯迅の墓の道

上海の夜と思う夜の赤い酒

蘇州では蘇州の歩幅塔二つ

山容の変幻天地玄黄と

水牛に雨笠煙蓑の情こころあり

秋の月餅春風点心店にありや

妻に買う小さい翡翠の色定め

飛ぶ鳥へ飛ばざる鳥へ初光

但馬牛美し百獣の王よりも

東京の娘の着くを待つ祝膳

祝膳孫の正座はままならぬ

幼な子も思いを遂げた顔はよし

番号に悲喜ある日なり風の中

観心寺

探梅に大楠公という地酒

新内は腸にしむ路郎の忌

七夕の赤い色紙へ釈路郎

毎日の中の一日誕生日

次女幸結婚

鏡照り照りて花嫁はわが娘

還暦や吉祥天と初詣

還暦の若水なれば若やいで

還曆は実年の花弓始

今年また孫からかかる初電話

書初の虎の一字に心足る

八十になったら恋をしてみよう

考える人の指まで考える

ふる里に四季霧まとう大樹あり

仏一体数知れぬ露の奥

風の糸妹ついで持たされず

今の世も皿を数えるのは女

龍飛岬

友三人鼎のごとし風の中

甲吉・五楽庵氏と

美し夜の酒かな鱈腹と話そ

北 京

稲光天壇瞬時帽の影

懸 空 寺

われここに残り魑魅魍魎となれば

歡喜天息をつくろう偽夫婦

虫が来て晩学の灯を和ませる

僕の酒耳順というにほど遠く

六十をいくばく夢も裏返る

こんにやくの嫌いな客で覚えている

茶の間出る父は叱った顔せずに

友だちがしみじみ光る年となり

六十だ飾りを外しはじめよう

雪月花日本の味は足るを知り

風邪に寝て額田王と遊ぶ

幕切れの破顔一笑は鬼だ

恥ずかしい列がだんだん長くなる

初孫を抱いておならを貫うたり

馬に乗る姿を今にあこがれる

寝姿も迷う形でいるらしい

雑踏へまぎれるときの好きな人

船渡御へそら似なりともなつかしさ

わが予感形となりぬ羊雲

おみくじにやがたとあつてよろず吉

かんぜより下手の一本まぎれなし

モナリザの微笑は自分への答

七十と三十の恋指相撲

初空や師の忌父母の忌めぐる年

あらたまの朱を入れるまずわが句から

元旦に紹興花彫酒の少し

孫ふたり初湯の桶のよい響

明けましておめでとう無言電話にも

マジシヤンはきつと帽子へ消えたんだ

ほんとうに死んでしまった死んだふり

サツチャーとアキノの違いほど違い

大覚寺

写経して二月彼岸の日の光

思慮深き一本それは折れた葦

寂庵 二句

寂庵の庵主の笑みと微笑仏

白頭巾白涎掛け雪仏

大相撲昔のことは言わぬこと

辻川慶子さん還暦

還暦にはたちの青春がまだ残り

世は暗し腸饞えた鯉のぼり

義妹の死 三句

槍穂高白馬も葬送れ神妙に

紅冴えて花嫁化粧にはあらず

別れして猫の頭を撫でるのみ

走馬灯花も犬ほど走るなり

追うことは逃げることなり走馬灯

高野山にて 三句

般若湯師の槍さびが聞こえそう

法悦にあらざるはなし仕舞風呂

宿坊の夜明け寝相も人格だ

秋田・青森の旅 四句

北限の鈴虫を聞くひとり旅

寒風山男鹿の芒は背が低し

太宰真似て頼杖をつく斜陽館

昼の月十三の砂山海晦し

桐一葉猫も坐禪の向うむき

さんふらわあ号へ洋上初日の出

うたせ湯に印結ばねど結跏趺坐

木山遠二氏へ

卒寿よく猫と心が通じ合い

川口弘生さんを偲ぶ

つらつら椿つらつら大和郡山

鹿野城山神社祭礼

幟差の一人ひとりが鹿之助

高鷺亜鈍さんへ

赤いベレー老いてますますフオーヴェイズム

日日恐懼昭和とともに生きてきて

ハンカチの白で押し通すは難し

仏壇に嵩張る嫁の買うりんご

花が散る弊衣破帽をなつかしみ

西尾栗先生の叙勲を祝う 二句

豊明殿夫唱婦随のかしこけれ

木杯へ川柳六十年なみなみと

屠蘇祝うわが家の龍虎おだやかに

お元日香水匂いすぎぬこと

絵双六妻も子供のときの顔

還暦の妻と易々諾々と旅

武藏野陵 二句

茫茫五十年醜の御楯は呆け立つ

死にぞこない生きぞこないへ白い雨

柴又帝釈天

これはこれは寅さん陽気草だんご

夏は陽画冬は陰画の佐渡の旅

栗谷春子さんのご夫君を悼む 二句

この世からあの世は見えさし向かい

あの世からこの世は見えてさし向かい

生きているうちは明かせぬ吾亦紅

高橋操子さんを悼む

仏の掌ほどに大きい手でありし

ラッセララッセラ空を飛べねぶた

老司祭黒にも無垢の衣あり

モナリザも拈華微笑に違いなし

アメリカンフットボールは麻薬かな

ヘルメット着けて一弾頭となる

青芝にQB牛若の生まれかわり

ぶち当たれぶち当たれ音小気味よき

ヘルメット挙げ雄叫びや勝鬨や

湖の雨を水底から見つめ

藤の花わが背わぎ妹子死語ならず

佐渡小木にて

夏空に映りそうなるたらい舟

高鷲亜鈍氏を悼む

白黒の次の世へこそ立たせけれ

嗚呼 藤沢桓夫先生

さわやかやこんな小さい仏さま

完璧な乳房に逢うた母以来

安らかさ乳房の形りの土まんじゅう

羽衣を盗られたような風邪を引き

十二月妻の俠気も役立たず

桑名水郷

揖斐長良やんまのつるむ川の幅

お元日老醜枯淡紙一重

神風の八坂の郷の朱の破魔矢

朱の破魔矢吉井勇の血も通い

福寿草五人家族はこのような

七夕や春信の朱と路郎の朱

うれしさは秋の実りが我が家にも

勾玉をじいは磨いているのだよ

雲行くも鳥動かぬも志

名月に供え月餅菓子でなし

さびしいよ極楽鳥が名だなんて

砂丘渺茫歩けば砂に言葉あり

北国になお北のあり流水よ

猿山のお前川端康成か

あかねさす白鳥宮に初詣

初日かげわが句碑に酒まいらせん

孫膝にしておさまるは句碑の膝

この世での初めての雪見るみのり

孫抱いて鶯宿梅の気分かな

這い這いふたり不思議不思議と懺悔懺悔

風邪熱のみのりちゃん桃の花のよう

シーソーは問答に似る爺と孫

橋立を縦に見下ろすのは男

西光子さんを悼む

寂光の胡蝶蘭とはなり給い

山内静水さんを悼む

静水と号したぎりに滾る水

水戸にて 三句

梅紅白義公烈公今に生き

梅熱し斃而後已

鮫鱈も汗かきならん鮫鱈鍋

胃薬を買う漱石の札の顔

上村松篁画伯米寿

四季浄土花は歌うて鳥匂う

直原玉青画伯米寿・玉青館落成

青玲の気の魂と凝る館

秋深し位牌に秋の一字あり

悼 谷垣史好君

写経とはおのれ眠らす子守唄

生きるとは写経に続き賀状書く

旅やよし瘦せた夫に肥えた妻

北の旅残るさくらを妻が褒め

葉桜の温泉は花の溶けた色

豊頬のひきめかぎばな孫娘

弟橘媛を恋せし日を覚え

魂で咲き魂で散るさくら

老いてしずけし淫の字も姦の字も

酔醒めのこれも汚職のダムの水

鉛筆の匂いは五十年同じ

踏鞴踏む阿形吽形人間座

鱗雲一枚こぼれ亡母の窓

九月十月行き着く酒の十二月

犬小屋にペンキで窓が描いてある

山小屋の一軒を焼く苺の火

知覧特攻基地

これが遺書「平平凡凡」四つの文字

お元日われに白毫給われよ

古稀の屠蘇壺萬里酒羅生門

紅の爪枯山水の枯れること

椿咲く有為の奥山紅椿

椿咲く浅き夢見じ白椿

阪神大震災 八句

地にひそむ魔の天空へ駈け抜けし

吽形の仁王の突如叫ぶとき

南 京 町

閃光から光焰首なき兵馬俑

地震熄んで一輪の薔薇毅然たり

遠吠えのごとく余震のつづく夜

月赤しわれも傾く三宮

柳友の死に近寄り<sup>が</sup>たき長田町

これからも神戸に住むと卒寿の師

柳の芽姉三六角蛸錦

田辺聖子先生へ

紫綬うれしインクひとときわ匂い立ち

長男と

酌ぎ交わし而立と古稀は一瞬ぞ

千代紙にはや好きな色孫娘

政治家の臍を比べてみたくなる

乃木さんに似た人と会うひとり旅

大井川鉄道

茶島によし杉によし鯉のぼり

室生寺

女人高野石楠花浄土塔浄土

合せ鏡とや蓼科湖白樺湖

土佐にて

淀川と四万十川の生きる音

十人と一人の友のように飲み

哀悼 西尾榮先生

南無菊花義礼信を棺に入れ

足弱の師なり天女に手を引かれ

閻魔にも和顔愛語を説き給い

目の限り菜の花の黄が師の浄土

波の音よき思い出を繰り返し

平成の荒ふる年の長刀鉾

あの髭は黒縄地獄からの使者

掌で囲むほどの火も恋の巴里祭

大矢十郎さんを悼む

句の仏補陀落山に妻を詠み

八月十五日

五十年毎年夾竹桃と蟬

富士山の藍に一札してしまふ

睡蓮も輪廻転生の旅か



イカソーメン	……………	一五	銀杏の黄	……………	一三	雨意將に	……………	一五
呼吸つめて	……………	一〇	一輪の	……………	一三	兔の目	……………	一七
生き死には	……………	一八	一茶忌の	……………	一七	牛が眼を	……………	一三
生きている	……………	一八	一生に	……………	一五	牛小屋に	……………	一八
生きるとは	……………	一九	一点鐘	……………	一三	うたせ湯に	……………	一三
胃葉を	……………	一七	一匹の	……………	一	美しい炭火	……………	一〇
居酒屋の	……………	二〇	いつまでも	……………	一四	美しいものに	……………	三
いざ孫と	……………	一四	稲妻に	……………	一三	美しき	……………	一四
勇の川	……………	一四	稲光	……………	一三	美し夜の	……………	一三
石くれも	……………	一五	犬小屋に	……………	一〇	乳母車	……………	一七
石の階	……………	一五	犬と住む	……………	一四	産声の	……………	一五
椅子蹴って	……………	一四	胃半分	……………	一五	旨いとも	……………	三
一隅と	……………	一七	揖斐長良	……………	一五	馬に乗る	……………	一六
一芸に	……………	一九	今の世も	……………	一三	生まれし時	……………	一四
一日に	……………	一三	妹に	……………	一三	海底の	……………	一五
一日の	……………	一六	祝膳	……………	一五	海鳴りへ	……………	一三
一年生	……………	一三	鯨雲	……………	一七	海の風宮島	……………	一五
一番に	……………	一三	因襲は	……………	一五	海の風竜馬	……………	一五
一枚に	……………	一六	陰陽石	……………	一六	海渡る	……………	一七
銀杏散る	……………	一五		……………		梅が言う	……………	一五

(う)

梅紅白	……	一六	炎天に	……	五	惜しみなく	……	三
梅熱し	……	一七	苑の鶯鳥の	……	五〇	おぞましき	……	四一
梅よりも	……	一七	鉛筆の	……	一〇〇	恐山空焼ける	……	四〇
鶉もやがて	……	二三	閻魔にも	……	一〇六	恐山四人	……	四〇
裏梅は	……	一七				おだまきが	……	一一
裏切られ	……	一七				おたやんは	……	三四
裏切りに	……	一六	老いてしずけし	……	一九	落椿	……	三〇
うれしさは	……	一五	追うことは	……	一八	落雲雀	……	三五
鱗雲	……	一〇〇	大きな滝に	……	三四	落武者の	……	四二
叶形の	……	一〇二	大相撲	……	一八〇	お使いの	……	二五
			オーバーの	……	五九	お手植えの	……	四三
			お元日香水	……	一八六	弟橘媛	……	一九
			お元日日本人	……	九〇	おとがいへ	……	四七
			お元日老醜	……	一九	男あり	……	七一
			お元日わが家	……	六	男を磨く	……	一六〇
			お元日われに	……	一〇一	男の子欲し	……	四
			送り火を	……	一五	男へも	……	八六
			幼な子も	……	一九	お年玉	……	六
			小佐野兎玉	……	二〇	おとといと	……	二六
			おしなべて	……	三	音のみの	……	七

〔え〕

〔お〕

処女の死	………	六〇	学生を	………	九	かまきりの	………	一四七
鬼あざみ	………	七〇	額縁を	………	三	神風の	………	一九二
尾道や	………	九六	革命を	………	七〇	雷蝶	………	二六
お恥ずかしい	………	一九	学問の跡形	………	五	軽い嘘	………	一五七
おみくじに	………	一七	学問の灯は	………	三	枯枝に	………	九〇
おもしろさ	………	一四	籠の鳥	………	六	川の面の	………	三〇
禽檻にいる	………	一五	風花す	………	六	考える人	………	一七
親捨てた	………	三	風花の	………	三	歛喜天	………	一七
檻の鶴	………	一三	風薫る	………	六	姦計を	………	九
お六櫛	………	一七	風邪に寝て	………	一五	韓人の	………	四
恩借に	………	一五	風邪熱の	………	一五	元日の駅前	………	三
穩健を	………	一〇〇	風邪ひいた	………	三	元日の恋に	………	五
恩師の死	………	五	風渡る	………	三	元日や	………	三
恩師嬰鏢	………	一三六	かたくなに	………	三	かんぜより	………	一七
おん目元	………	二	片肌	………	四	元旦ぞ	………	九
飼猫へ	………	一七	形見分け	………	四	元旦に	………	一七
鏡照り	………	一七〇	合掌の	………	四	元旦も	………	一三
かかる時	………	二	かなしみの	………	五	元旦や偈頌	………	一八
書初の	………	一七	金貸しに	………	四	元旦やわけて	………	四
	………		鐘の音	………	五	寒風山	………	一八

完璧な	……………	二九	切手にも	……………	二七	空腹も	……………	二二六
還曆に	……………	二八〇	樹に添うて	……………	二二〇	九月十月	……………	二〇〇
還曆の妻	……………	二八六	君おもう	……………	二九	草いきれ	……………	二一三
還曆の若水	……………	二七〇	君にふたごころ	……………	二四	草臥れが	……………	二四
還曆は	……………	二七	君の骨	……………	二四	草の芽が	……………	二四
還曆や	……………	二七〇	木も草も	……………	二〇	草花に	……………	二〇三
			恐懼せり	……………	二六	草餅へ	……………	二四
黄色い屋根の	……………	二六	恐妻家	……………	二〇	孔雀羽根	……………	二四
菊花展	……………	二六	切株の	……………	二九	葉玉の	……………	二〇一
菊大輪	……………	二六	きりぎりす	……………	二七	屈辱の	……………	二五
菊人形	……………	二六	キリストの	……………	二七	葛の花	……………	二九
菊の呼吸	……………	二六	霧のダム	……………	二四	口説かれて	……………	二二三
菊の壺	……………	二六	霧の夜の	……………	二七	句の仏	……………	二〇八
菊の露	……………	二六	桐一葉	……………	二八	句碑ありぬ	……………	二二
菊の日の	……………	二六	金環蝕	……………	二六	雲波に	……………	二八
偽証する	……………	二〇	金柑は	……………	二五	雲行くも	……………	二九
婦省子に	……………	二〇六	銀漢へ	……………	二六	苦楽園	……………	二三一
ギター抱き	……………	二六	さんなんの	……………	二四	クリスマス折れる	……………	二七
北国に	……………	二六	金脈へ	……………	二四	クリスマスカード	……………	二三
北の旅	……………	二六		……………		栗の毬	……………	二六

暮れ切らぬ	………	三	恋なれやわれに	………	四	極月や	………	二五
暮れるばかり	………	九	恋の句を	………	六	ここに來て	………	七
黒い炎は	………	九	鯉のほり	………	四	ここは土佐	………	三
黒髪を	………	三	恋人が	………	四	志	………	二七
黝々と	………	六	恋人の名より	………	五	來し方を	………	一五七
黒百合を	………	三	恋人の膝は	………	九	五十年	………	一〇八
勲一等	………	二	恋文の	………	一六	コスモスの	………	五三
勲章の	………	七	恋瘦せの	………	一五	牛頭馬頭の	………	一〇四
啓蟄の	………	四	強引な	………	九	兎玉誉士夫の	………	一〇
削られて	………	九	香煙縷々	………	三	子と來れば	………	七
月下美人	………	一八	豪雪の	………	三	今年また	………	七一
月光に	………	五	校長が	………	四	琴古く	………	九三
結婚を	………	七	耕耘機	………	七	子と見れば	………	二五
決断の	………	五	香の銘	………	五	子の頭	………	五四
建國祭	………	六	水挽く	………	三	子の名ほど	………	一四
建仁寺垣	………	二六	こおろぎの	………	四	子の寝顔	………	四
原爆忌	………	七	娘が嫁ぎ	………	五	この花に	………	三六
恋なれや汝れに	………	四	子が病んで	………	四	木の实彫り	………	四七
			古稀の屠蘇	………	一	この世から	………	一八七
				………	二	この世での	………	一八五

これが遺書	……	二〇二	讃岐富士	……	七五	死後の肋は	……	二二三
これからも	……	二〇四	裁かれるのに	……	二一〇	写経して	……	二七九
これはこれは	……	一八七	さびしいよ	……	一九三	四十過ぎ	……	一九九
これもおやすみ	……	一四	淋しさは	……	三六	紫綬うれし	……	二〇四
こんな恋	……	三三	サルビアも	……	一七	紫綬やよし	……	二〇四
こんやくの	……	七四	猿山の	……	一四	志操とや	……	一九
混浴の	……	二四	さわやかや	……	一〇	親しさは	……	四〇
婚を約し	……	二	参観日	……	一九	七月の	……	四四
			三人の	……	七	七月よ	……	二六
			さんふらわあ	……	一八	実印に	……	三三
サーカスに	……	一五	三文オペラ	……	一五	漆黒の	……	三三
さい果ての	……	七	山容の	……	一七	死顔の	……	三三
最晩年	……	三三				死にぞこない	……	一八七
囀るは	……	三				死に行く	……	一五
盃の	……	〇八	自愛とは	……	一五	師はあらず	……	一六
魚屋の	……	五	思案まとまり	……	一六	鳥一つ	……	一七
鷺一羽	……	八四	シーソーは	……	一六	四面楚歌	……	九
砂丘有情	……	一四	謝々と	……	一六	写経とは	……	一六
砂丘渺茫	……	一四	潮干狩	……	一六	寂庵の	……	一八〇
サツチャート	……	一七	四季浄土	……	一七	寂光の	……	一六
雑踏へ	……	一六	シクラメン	……	一四			

〔さ〕

〔し〕

弱肉強食	……	三五	出産日	……	四五	除夜を聞く	……	三三
寂まくと	……	六九	手術なお神の	……	八〇	死より先ず	……	一六六
寂滅と	……	九八	手術なお交響楽	……	八〇	白菊千日	……	一五五
三味線も	……	二二	朱の鳥居	……	六六	思慮深き	……	一七九
軍鶏抱いて	……	一五	朱の破魔矢	……	九二	白い服の	……	一〇七
上海の	……	一七	手榴弾	……	三三	白色も	……	一四三
終焉や	……	八五	春愁の無より	……	六六	路郎忌に言葉を	……	五五
十二月あしかの	……	五八	春愁の最たるは	……	五二	路郎忌に炸裂	……	五五
十二月子供	……	一七	春情や	……	四四	路郎忌の暑さ	……	一六四
十二月子の	……	三九	春闘の	……	一〇	路郎忌の氷も	……	一三四
十二月三十一日	……	四〇	春眠の	……	三三	路郎忌のこれも	……	一六四
十二月妻の	……	一九	正月元旦	……	三三	路郎忌の天守の	……	九八
十二月の	……	〇八	將軍に	……	三九	路郎忌のわれよき	……	一三四
十二月宝石	……	一三	少年の幾人	……	三九	路郎忌や	……	一三三
十人と	……	一〇六	少年のように	……	三三	路郎選集	……	一三四
十年の	……	一〇三	娼婦死し	……	二九	路郎の忌立膝躰	……	一八七
修業とや	……	一五	小便を	……	一〇五	路郎の忌天牛	……	一八七
宿坊の	……	八二	消防車	……	七九	城うらの	……	一三四
受験子に	……	三三	初冬の恋	……	四六	白黒の	……	一九〇
受験子の	……	九二	除夜過ぎて	……	四六	白頭巾	……	一八〇

白蝶入り	………	八九	水郷の胸の	………	五	青春は	………	二〇
城のある	………	三	水仙が	………	三七	青年長髪	………	六
白は光りに	………	一五	水仙より	………	三〇	青年の	………	六
心眼に	………	五	水中花	………	二六	制帽の	………	四
心経の	………	一〇三	水都祭	………	四三	税務署出て	………	七
申告を	………	一五	水平線	………	一四	聖夜の餐	………	三
新婚の	………	二九	睡蓮に	………	七三	青玲の	………	一七
真実の	………	一五	睡蓮の	………	一五	清冽な	………	一五
人生に	………	六	睡蓮は	………	九	雪月花	………	一五
人生薄暮	………	三	睡蓮も	………	一〇八	惜春の	………	一五
人生譜	………	五	清しさは	………	一〇六	積雪一丈	………	三
真相は	………	一四	スケートを	………	七	背の小さい	………	一三
新内は	………	一六	涼しげに	………	一四	攻める扉	………	六
新年や	………	一〇八	進む時計	………	三	選挙をば	………	一五
ジンフィーズ	………	五	スト権スト	………	一〇八	閃光から	………	一〇三
	[す]		砂時計	………	一五	先生に	………	七
醉眼に	………	一三		[せ]		禅僧の	………	一四
水牛に	………	一七	政治家の	………	一〇五	銭湯に	………	七
水郷の鯉のぼり	………	五	静水と	………	一六		[そ]	
水郷の微風	………	五	青春の	………	二九	宗祇の水	………	一六

蘇州では	……………	一七	蝸壺へ	……………	三	誕生の	……………	九〇
掃苔の隣の	……………	七〇	胤の糸	……………	一七	端然と	……………	一〇一
掃苔の母の	……………	呪	太宰真似て	……………	一八	探梅に	……………	一六九
走馬灯花も	……………	八二	但馬牛	……………	一六	タンポポの	……………	一三三
走馬灯霊は	……………	一三六	墮地獄の	……………	一四	タンポポは	……………	一三四
卒寿よく	……………	一八四	立たせたき	……………	一四			
その朝も	……………	一五〇	踏鞠踏む	……………	一〇〇	知恵の輪を	……………	二〇
その時の	……………	一五〇	立ちたくて	……………	一五	父親に	……………	一九
その日以後	……………	一三	立話	……………	一八	父親の	……………	一四三
蕎麦の花	……………	九	立ったまま	……………	呪	父恋し	……………	一五

[た]

大山も	……………	一六	田中を刺し	……………	一四	父と来て	……………	一九
大文字恋の	……………	一五	七夕の	……………	一七	父と子と	……………	一四
大文字はや	……………	一五	七夕や	……………	一五	父の忌に	……………	一六
大文字額の	……………	一三	楽しげは	……………	一四	父の苦悩に	……………	一八
大文字夢の	……………	一三	旅ごころ	……………	一三	父の乗る	……………	一六
大輪の	……………	一三	旅人へ	……………	一四	父の日か	……………	一六〇
滝氷る	……………	一五	旅人も	……………	一五	地にひそむ	……………	一〇三
磔像へ	……………	一五	旅やよし	……………	一五	地の果ての	……………	一五
魂で	……………	一五	魂で	……………	一五	茶の間では	……………	一五九
断崖絶壁	……………	一五	断崖絶壁	……………	一五	茶の間出る	……………	一七〇

[ち]

茶 島に	……………	二〇五	妻 若し	……………	一六	テロリスト	……………	二
チュールリップ	……………	二二	梅雨明けの	……………	八七	天使と同じ	……………	五
蝶がいて	……………	一〇三	露 草よ	……………	一四	天 井が	……………	八
朝刊の	……………	一〇三	梅雨ついで	……………	一四〇	てんと虫	……………	七
頂上に	……………	二二	梅雨の街	……………	一四六	天 来の	……………	一七
長男の	……………	六	つらつら椿	……………	一八四			
蝶の妍	……………	三六	つり合わぬ	……………	三〇	同期の桜	……………	三
千代紙に	……………	一〇四	吊 皮に	……………	一三	遠き人を	……………	七
猪口を持つ	……………	五	吊 皮は	……………	九	東 京の	……………	六
			鶴の愚鈍	……………	一五	道化の死	……………	二
			蔓ばらと	……………	二三	東 郷 湖	……………	四
						当 選を	……………	五
月 赤し	……………	一〇三				遠 吠えの	……………	三
月が出て	……………	一三七				陶 枕に	……………	九
酌ぎ交わし	……………	一〇四	剃髪をして煩惱	……………	一六	遠めがね	……………	四
月 天 心	……………	五	剃髪をして紫	……………	一五	獐 猛な	……………	八
土に字を	……………	四	鉄の火と	……………	一三	冬夜の凍て	……………	五
椿咲く浅き	……………	一〇三	鉄砲玉も	……………	一四	通り抜け	……………	六
椿咲く有為の	……………	一〇三	手に足に	……………	九	都会の夜	……………	二
妻に買う	……………	一六	掌で囲む	……………	一〇七	年 寄の	……………	四
妻に病まれ	……………	八	寺と萩	……………	元			
妻よ子よ	……………	五	テレビ見る	……………	六			

(二)

(七)

(と)



蓮の花は	………	五	花の絵の	………	五	母一人	………	一七
斜に見て	………	八	花つけて	………	一〇	亡母の闇は	………	五
恥ずかしい	………	七	鼻先を	………	五	亡母の闇この世は	………	五
橋立を	………	六	花言葉	………	四	亡母の闇黒い塚	………	六
葉桜の	………	九	花が散る	………	五	母の手を	………	四
羽衣を	………	九	鳩時計の	………	七	母の顔	………	五
白牡丹	………	六	初孫を	………	六	母と来て	………	四
白秋は	………	五	初孫と	………	六	羽根ペンで	………	三
白菜の	………	五	初日記	………	九	花よりも	………	四
吐く息も	………	六	初空や	………	七	反葬は	………	四
墓の前もとの	………	五	初日光	………	五	パントマイムの	………	三〇
墓の前刻去る	………	四	初日かけ	………	六	般若湯	………	一六
墓があり	………	七	初恋の	………	四	半白の	………	四
這い這いふたり	………	五	初鏡	………	三	晩涼の	………	三
杯なめて	………	四	初明り	………	六	花嫁に	………	五
背徳や	………	八	パチンコ屋	………	七	花火爆ぜ	………	一〇
敗戦日われ人生	………	三	蜂蜜に	………	三	花の墓	………	七
敗戦日分水嶺	………	五	蜂の歩くは	………	六	花の散る	………	五
敗戦忌	………	八	八十に	………	七	鼻の孔	………	三
鯊を釣る	………	五	花の宴	………	七	花の宴	………	七

母病むに	……………	一五	人の世や棺に	……………	三	昼の酒	……………	二七
ハワイまで	……………	一九	一人去り	……………	四	昼は花を	……………	二三
晩秋に	……………	一〇七	一人旅	……………	三	灯を消せば	……………	四七
万歳万歳	……………	一六	人を待つ	……………	六			
番号に	……………	一六	日向ぼこ梅干	……………	六			
ハンカチを	……………	一三五	日向ぼこ病衣	……………	七	夫婦には	……………	七〇
ハンカチの	……………	一八五	火の消えた	……………	三	深眠り	……………	七
春孤独	……………	五	日の高さ	……………	一〇〇	笛吹き童子	……………	六六
春風の	……………	五	日日恐懼	……………	一四	福寿草五人家族	……………	九二
春惜しみ	……………	五	百匹に	……………	一三五	福寿草父子兄弟	……………	四
ハラキリ由紀夫	……………	八五	病院の丑満時	……………	八	袋ごと	……………	八
ハワイ行	……………	一〇九	病院の金魚	……………	八	富士小さし	……………	二六
			病院の風呂	……………	二〇	富士山の	……………	一〇八
			病妻は	……………	八	藤の花	……………	九〇
光堂	……………	八二	氷柱花	……………	二七	ぶち当たれ	……………	八九
髭を剃る	……………	一五〇	氷囊の	……………	一〇七	仏手柑	……………	一四
膝に手を	……………	四	豹を着て	……………	一五	仏像を	……………	六
日だまりに	……………	一四	ピリの顔も	……………	三	仏壇に	……………	一五
ひた走る	……………	四	昼の月十三の	……………	一	葡萄食べ	……………	二五
人妻と	……………	一五	昼の月飄湖に	……………	一〇一	舟歌は	……………	三
人の世や嗚呼	……………	七				船渡御へ	……………	七

〔ふ〕





默契やいまも……………二九

〔や〕

八百長相撲も……………二五

やがて女は……………二三

やがて君と……………二七

優しい人を……………四

安からめ……………九

安らかさ……………九

柳の芽……………四

柳ポブラ……………七

山 男……………五

山小屋の……………二

病み上りに……………二六

病みて長し……………二七

槍穂 高……………八

やわらかい……………四

〔ゆ〕

憂鬱を……………三

誘拐を……………三

遊学の……………三

憂 国 忌……………八九

夕桜琴朱の布に……………七五

夕桜路郎が……………三三

友 情 に……………二六

浴衣着て……………二六

雪 国 の……………八

雪霏々と……………四

雪を掻く……………三

逝く春へ……………二五

湯槽出る……………三

夢醒めて……………二五

夢に見る……………二〇

百合も薔薇も……………二七

〔よ〕

酔醒めの……………二〇

養 命 酒……………三六

横 顔 の……………四

余呉の湖……………五

横揺りに……………四

四つ足で……………九

淀川と……………二〇六

淀川の……………七

世の移り……………三

世は暗し……………八〇

呼び戻す……………九

呼 鈴 を……………三

読み初めの……………八

読む限り……………二〇

夜の長さ……………七

夜の波……………七

〔ら〕

落 嵐 の……………四

落日と……………三

落 選 す……………三

落 選 の……………三

ラッシュアワー……………二六

ラッセラ……………八

ラブレター……………三〇

〔り〕

陸 橋 は……………九

柳暗や……………三

流木は……………五

緑陰に……………三

りんどうの……………五

ルパンゲの……………七

霊柩車……………三

札を尽くし……………四

[ろ]

老桜の……………三七

老司祭……………八

老醜の……………四

蠟燭の……………三

労働歌……………九

六十だ……………七

六十を……………四

紹刺する……………九

六法全書の……………三〇

[わ]

わが影の……………四

わが男子……………五

わが妻に……………二

若者の……………三

わが予感……………七

別れして……………八

鷺の眼も……………五

童唄……………二

われここに……………三

われに過ぎたり……………五

われもひとも……………四

われもまた……………四

われら迎う……………九

われをしも……………四

## あ　と　が　き

身心ともに脆弱な私が古稀まで生きることの出来たのは川柳のお蔭で、麻生路郎先生をはじめとする恩師、先輩、仲間の庇護、支援を心から感謝いたします。

この句集を、青玄の伊丹三樹彦先生のご紹介で沖積舎から発刊出来たことをよろこび、冲山隆久社長のご指導に深くお礼を申し上げます。

九月九日

橘高薫風

経歴

大正15年7月11日兵庫県尼崎市に生まれる

桐生高等工業学校三年中退（現群馬大学

工学部）

昭和30年1月川柳作句をはじめ

昭和32年麻生路郎先生に師事 川柳雑誌社編

集部に入る

昭和40年川柳塔社創立委員として先生の遺志

を継ぎ「川柳塔」を発行

昭和45年編集長に就任

昭和57年副主幹・副理事長に就任

平成2年理事長に就任

平成6年主幹に就任

社団法人 全日本川柳協会理事

日本現代詩歌文学館評議員

選者 朝日新聞なにわ柳壇

山陽新聞柳壇

キリスト教月刊誌「声」川柳

大阪都市協会月刊誌「大阪人」川柳

大阪府警本部月刊誌「なにわ」川柳

西日本文字放送川柳教室

講師 NHK文化センター

NHK学園川柳入門

朝日カルチャーセンター

毎日文化センター

産経学園梅田第二

各川柳教室

古稀薰風

平成七年十一月七日発行

著者 橘高薰風

発行人 冲山隆久

発行所 株式会社冲積舎

東京都千代田区神田神保町一―五二郵便番号一〇一

電話〇三―三三二九一―五八九―振替〇〇―三〇―七一七六三二

シライ・フォトタイプ＋互恵印刷／小高製本

